The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ビーバーと行為的直観 ： 後期西田幾多郎のマルチスピーシーズ哲学試論
Author(s)	松木, 貴弥
Citation	共生学ジャーナル. 2025, 9, p. 17-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

ビーバーと行為的直観

―後期西田幾多郎のマルチスピーシーズ哲学試論―

松木 貴弥*

Beavers and the Enactive-Intuition

An Attempt at Later Nishida Kitarō's Multispecies Philosophy

MATSUGI Takaya

論文要旨

西田幾多郎は、無数の存在者が相互に関わる世界について論じた日本の哲学者である。本稿は、マルチスピーシーズ民族誌との共鳴を背景とした上で後期西田哲学をマルチスピーシーズ哲学として解釈するものである。鍵となるのは、彼の個物論における身体・行為的直観・時間・ポイエシスをめぐる議論である。これらの検討を経て、本稿は西田によるビーバーへの言及をビーバーの生態と共に検討する。西田はビーバーを批判的に論じるが、ビーバーの生態を詳細にみると、ビーバーこそが西田が論じる個物を体現していることが分かる。さらにこの観点からみいだされる西田の議論は、生物発生以前の世界をも射程に入れるラディカルなマルチスピーシーズ哲学としての解釈を導く。

キーワード　西田幾多郎、ビーバー、マルチスピーシーズ、行為的直観

Abstract

Nishida Kitarō, a Japanese philosopher, conceptualized the historical world as a mediating process of interactive creation consisting of innumerable individuals. This paper reinterprets his later philosophy through a multispecies lens, drawing on contemporary discussions of multispecies ethnography in anthropology and the environmental humanities. The first part of the paper explores key concepts in Nishida's theory of the individual, including "body," "enactive-intuition," "time," and "*poiesis*." The second part focuses on sporadic, but significant references to beavers, often presented negatively in his work. However, a deeper examination of beaver ecology reveals that beavers exemplify Nishida's theory of individual. This analysis reframes Nishida's perspective, positioning his treatment of beavers as an early, radical multispecies philosophy that extends beyond human and even biogenic boundaries.

Keywords: Nishida Kitarō, Beavers, Multispecies, Enactive Intuition

* 大阪大学大学院人間科学研究科 共生学系 未来共生学講座 共生の人間学分野 博士前期課程 2 年；takayamatsugi@gmail.com

1. はじめに

西田幾多郎（1870-1945）は、主に 1900 年代前半に活躍した日本の哲学者である。後期西田哲学[1]と呼ばれる『哲学の根本問題』（1933）以降の著作における課題が「現実の世界」の解明にあることはよく知られている。ここで「現実の世界」とは「我々が之に生れ之に於て働き之に於て死にゆく世界」（六・171）を意味する。西田によると、世界をみて世界について考える私たちは世界に対して外的な傍観者ではない。どこまでも世界の内にある存在者である。後期西田の眼目は、そうした現実の世界のあり方を論じることにある。

現実の世界における存在者は何も人間にかぎられない。西田においては、山や川、木や石といった非人間的な所謂自然物も現実の世界の存在者である（六・46）。こうした非人間的なものも含む個々の存在者を西田は「個物」と呼ぶ。西田は現実の世界を、無数の個物が存在しそれらが相互に関係する世界と考える[2]。「我々に現実の世界と考へられるものは、個物の世界でなければならない」（六・239）。

こうした後期西田の立場は、人間の中心性を揺るがすことにも繋がる。現実の世界において無数の個物が相互に関係する時、個物同士は「同列的」（六・87）な関係に置かれる。つまり人間は世界における無数の個物のひとつとなる。したがって、人間は世界の一部ではあっても特権的な中心ではない。後期西田哲学はこのように「人間中心の主観主義」（八・302）を退ける仕方で無数の個物が共に存在する世界を記述するのである[3]。

さて、後期西田哲学がこのように人間以外の存在者を含めた無数の個物を射程に入れるものであるならば、それは近年活発に研究がなされているマルチスピーシーズ民族誌（multispecies ethnography）と共鳴するように思われる。

近藤祉秋によると、2010 年頃に生まれたマルチスピーシーズ民族誌では、人間を中心的な研究対象としてきた既存の人類学に対して「人間以外の存在にもスポットライトを当て、人間と並んで記述の主役とすることが目指され」（近藤 2022:18）既存の人類学における「人間中心主義を批判対象として、「人間以上」の世界から考察を進めていく」（ibid.）。マルチスピーシ

ーズ民族誌の批判対象やそれが目指すことが、上述した後期西田哲学のそれと共通するとひとまずは考えられる。

もう少し詳しくみておこう。カークセイとヘルムライヒは、マルチスピーシーズ民族誌について「「人間的なるものにとどまらず、異なる類いの生ある諸自己との絡み合い（entanglement）の結果に関心をもつ人類学」に与する取り組みとして、数多なる生物の暮らしがいかに政治的、経済的、文化的な影響力を形づくり、また、それによって形づくられるのか〔という問い〕に重心をおく」（カークセイ・ヘルムライヒ 2017:96、〔〕内原文）としている。こうしたマルチスピーシーズ民族誌について、奥野克巳はそれが「扱う「種」とは、主に生命である」（奥野 2019:8）とし、上述の「数多なる生物の暮らし」をみるマルチスピーシーズ民族誌には「種とは何か」「生命とは何か」という根本的な問いが伴うことを指摘する（奥野 2019:8-9; 2021:20）。

これらに対して、先述の近藤と吉田真理子はマルチスピーシーズ民族誌の射程をより広く捉える。近藤と吉田によると、マルチスピーシーズ民族誌においては「動植物も引き続き盛んに扱われているが、菌類、ウイルス、精霊、機械など種を超えた存在のエージェンシーの分析なくして複数種の共存可能性（co-livability）を論じることができないという立場」（近藤・吉田 2021:30）がとられる。

なるほど、マルチスピーシーズ民族誌の主要な問題が生命的なものないし「生物種」に限定されるならば、それはいまだ既存の「種」や「生命」の概念に留まっているともいえる。この意味で、マルチスピーシーズの射程を生物的なものに限定する立場は、マルチスピーシーズ民族誌が包含する「種とは何か」「生命とは何か」という問題について、既存の種や生命概念を問いなおすまでには至れない。当然ながら私たちは動植物のみと関わっているのではない。非生物的なもの、つまり機械や道具などの人工物や山や川などの自然物と呼ばれるものとも関わっている。そうしたものすべてが人間と絡まりあう（ibid.:29）と考えるのが、近藤と吉田が論じる広い射程をもつマルチスピーシーズ民族誌である。

さて、こうしたマルチスピーシーズ民族誌の議論と同様、西田哲学も「種」概念の問いなおしあるいはより広く「生命」概念の問いなおしを含む（檜垣 2011; 池田 2018）。しかしながら、西田が展開する議論はカークセイとヘルムライヒや奥野が述べる生物種や生命を限定的に捉える立場よりも、むし

ろ近藤と吉田の述べるそれに近い。先述のとおり、西田は現実の世界における無数の個物同士の相互関係に着目しており、それは人間や生物ではない存在者すらも射程に入れるものだからだ。

本稿の目的は、以上のような後期西田哲学とマルチスピーシーズ民族誌の接触点に着目し、マルチスピーシーズ的な含意や射程をもつ哲学、すなわちマルチスピーシーズ哲学としての後期西田哲学の姿を描くことである。

もちろん、西田が展開する議論はフィールドワークや実証的な観察に基づいている訳ではない。この意味で、西田がなすのは決して個物の「民族誌」ではない。あくまで自身の思索に基づく個物の「哲学」である。しかし、こうした違いがあるにもかかわらず、西田の後期哲学からとりだされる議論は上述したマルチスピーシーズ民族誌のそれと接近する。本稿では、後期西田哲学の読解によってこのことを跡づける。これにより、後期西田のマルチスピーシーズ哲学が導かれるだろう。

この作業において鍵となるのが、後期西田における「身体」「行為」「時間」の三者の連関とそれに基づく「ポイエシス（制作）」についての議論である。これらは後期西田の中心的なテーマ群であり、後期西田哲学をマルチスピーシーズ哲学として解釈するための論点を多く含んでいる。

さらに、西田哲学のマルチスピーシーズ的解釈にあたり、私たちは大型齧歯類であるビーバーの生態を具体例としてとりあげる。というのも、西田も著作のなかでしばしばビーバーについて言及しており(4)、そこに後期西田哲学をマルチスピーシーズ哲学として解釈する際の問題点があるからである。本論でもみるように、西田はビーバーを人間のような道具の制作や使用を行わない存在者として扱う。ビーバーに代表される動物への否定的な言及をとおして、西田は人間の創造性を称揚し「人間のみ具体的実在である」（六・181）とさえ述べる。

しかしながら、以下で明らかにするように、後期西田哲学の身体・行為・時間・ポイエシスをめぐる議論はビーバーの生態においてこそ体現される。それにもかかわらず、西田自身はビーバーをやり玉にあげて批判するのである。本稿では、後期西田哲学の議論に沿い、こうした西田のビーバーに対する態度についても検討する。

本稿は次のように進む。まず、後期西田哲学における上記のテーマ群を検

討する。それにより、後期西田哲学をマルチスピーシーズ哲学として解釈するための論点を整理する（第二節）。次に、西田におけるビーバーの問題に焦点を当てる。その際、近年の動物学の成果を参照しながら前節の検討に基づきビーバーの生態を解釈する。後期西田哲学によるビーバーの再考を経て、私たちは西田のビーバーへの言及を改めて検討する（第三節）。この作業により、西田本人は自覚していなかったマルチスピーシーズ哲学としての西田哲学の姿を浮き彫りにする。

2. 個物・身体・時間

先に私たちは、後期西田が「現実の世界」を論じる際に、そこに存在する「個物」に着目することを確認した。それでは、後期西田において個物とは何か。個物相互の関係はどのように描かれるのか。本節ではこの問いに取り組む。

2.1 行為する個物

本稿が西田と共に論じる個物について確認することから始めよう。

アリストテレスは『カテゴリー論』において、個物を「何かこのもの」としての「第一実体」であるとしている（アリストテレス 1971:12）。これに対して、アリストテレスは「第二実体」として「第一に実体と言われるものがそれのうちに属するところの種とそれらの種と類」（ibid.:7）を提示する。例えば、「西田幾多郎」という特定の存在者は「第一実体」としての個物である。そして、個物としての「西田幾多郎」は「人間」や「ヒト」といったより一般的なカテゴリーである「第二実体」に属する。

これら「第一実体」と「第二実体」の関係は、判断における主語と述語の関係を考えると分かりやすい。第二実体は、例えば「西田幾多郎は動物である」や「西田幾多郎は人間である」といった形で、個物に対する述語となることができる。一方で、第一実体である個物は第二実体のようにどのような判断の述語としても置かれない（「人間は西田幾多郎である」ということはできない。cf. 十二・302）。つまり個物とは、判断において主語とはなっても述語とはなり得ない「何かこのもの」（アリストテレス 1971:12）である。

西田はこうしたアリストテレスによる個物の規定に従いつつも、これを超え出る独自の個物の規定を行う。その規定とは「行為するもの」としての個物である。

> すべて有るものは行為するものであるといふことができる。例へば、物理現象の如きものを行為するものと考へるのは、異様に感ぜられるでもあらうが、私の行為するものといふのは、〔……〕一般的限定即個物的限定、個物的限定即一般的限定といふ様に自己自身を限定するものを意味するのである（六・247-248）。

後期西田は人間や動植物以外のものを含めたあらゆる「有るもの」すなわち個物を「行為するもの」と考える(5)。

したがって、後期西田における個物を明らかにするには「行為」について確認する必要がある。上記引用においては、個物としての「行為するもの」に「一般的限定即個物的限定、個物的限定即一般的限定といふ様に自己自身を限定するもの」という謎めいた定義が与えられている。この定義の検討から、個物の規定である「行為」の内実を詳らかにしよう。

先に「我々に現実の世界と考へられるものは、個物の世界でなければならない」（六・239）という記述をみたが、西田は現実の世界を単に独立し孤立した個物が無数に存在する世界としては考えていない。西田は「個物の世界」について論じる際、それをあくまで「一般者」との関係において論じる。

一般者について確認しよう。まずもって一般者は「個物的なるものを限定する」（ibid.）ものである。これは、個物を自身の一部として包み、個物のあり方を規定するということである。そうした一般者の具体例として、西田は「法則」を挙げる（七・89）。物理的なものであれ社会的なものであれ、法則は個物をそれに従う（べき）ものとして制約する。西田において、あらゆる個物はこのような一般者に包摂されて存在せざるを得ない。いいかえれば、一般者に包まれず遊離し孤立した個物は存在しない。

しかし個物は完全に一般者に従属するものでもない。個物と一般者の関係について簡潔に述べられている箇所を引用しよう。

> 個物は一般者の限定として考へられる。一般的なるものに種差を加へて最後の種に至り、更に之を越えて極限点として個物といふ如きものを考へることができる。併しかかる考へ方によつて考へられた個物といふものは、真の個物ではない。それは何処までも一般者の一部分といふ意味を脱することはできない。個物は自己自身を限定するものでなければならない。而して個物が自己自身を限定するといふことは、逆に個物が一般的なる者を限定するといふことを意味する。個物が種々なる性質を有つとか、個物が働くとかいふのは、個物が一般的なるものを限定することを意味するのである（六・239）。

確かに個物は法則のような一般者による制約を受けて存在する。しかし、個物や個物の働きを一般者の作用に還元し尽くすことはできない。むしろ個物の働きとは、一般者の働きあるいは一般者それ自身を否定しそれを変容させ得るものである(6)。

「一般的限定即個物的限定、個物的限定即一般的限定といふ様に自己自身を限定する」とは以上のような一般者の働きと個物の働きが重なりあう・絡みあう事態を指す。そのような交錯こそが「行為」であり、個物とはこの意味での「行為するもの」である。

2.2 個物と身体

そして、こうした個物の働きと一般者の働きの交錯としての行為は「身体」において実現する。したがって、行為する個物は総じて身体的存在、身体をもつ存在、身体性を伴う存在である。

> 個物と個物との相互限定は即一般者の自己限定の意味を有し、一般者の自己限定即個物と個物との相互限定の意味を有つて居る。かかる場所的限定として有るものは、単に個物的なるものでもなく、単に一般的なるものでもない、個物的なると共に一般的、一般的なると共に個物的なるものである、即ち身体的なるものである（六・224）。

個物と一般者の働きの両立という一見矛盾した事態は、個物の身体において成立する。個物は身体に基づけられた個物性と一般性を備え、無数の個物と行為する。「我々の身体といふものは、個物が個物自身を限定する意味を

有し、更に個物が個物から生れ又個物を生む意味を有すると共に、外界との媒介者として道具の意義を有するのである」（六・91）。

私たちはここに、後期西田における身体概念の強調点をみることができる。中期西田哲学にあたる『無の自覚的限定』（1932）では、個物の存在根拠として身体が論じられていた。個物の存在根拠としての身体の性格を強調する同書では「身体といふのは往々単に行動の機関と考へられるが、身体なくして自己といふものはない」（五・61）として、身体を行為のための単なる機関や道具と捉えることが退けられる（松木 2024）。

これに加えて、本稿が検討している後期西田は、無数の個物同士の行為を論じるにあたり、それを可能にする媒介としての身体の性格を重視している。つまり後期西田は、個物が他のものと関係する媒介としての身体のあり方を強調するのである。「個物が個物を限定すると共に、外界との相互限定を有つといふ意味に於て、我々の身体といふものが考へられるのである」（六・92）。

2.3 身体と時間

さらに、個物の存在根拠であると同時に媒介でもある身体は、西田の時間論に結びつけられもする。

> 我々の身体も時間的にして空間的なるもの、空間的にして時間的なものである。現在に過去未来が同時存在的なるが故に、現在は自己矛盾として何処までも動いて行く、即ち現在が現在を限定し行く（八・95）。

どういうことか。通常身体というと、皮膚によって境界づけられ、ある個体が空間的位置を占める際に伴う空間的なものが想起される。しかし西田によると、身体は単に空間的なものではなく、時間的なものでもある。そして西田において、そのような空間的かつ時間的な身体がおいてある時間とは現在である。

身体は空間的かつ時間的な現在、すなわち「いま・ここ」においてある。したがって身体をもつ個物も「いま・ここ」においてある。このことは上述した通常の身体のイメージからも理解できる。私たちは昨日夕飯を食べて

いた身体を今日生きることはできないし、今日文章を書いている身体を明日に経験することはできない。

しかし、西田が身体との連関において論じる現在は、過去や未来から切り離されたものではない。西田によると、身体がおいてある現在には「過去未来が同時存在的」つまり現在においては既に決定されて変えようのないもの（過去）と、そこから新たなものを創出する可能性（未来）の二つが織り込まれている。身体をもって現在においてある個物は、現在に織り込まれた過去や未来と関係しながら行為するのである。

> 行為的自己の立場に於ては、現在は決定せられたものたると共に無限の可能性を含んで居る。真の現在といふのは、そこでは物が消え行き又生まれ出る場所でなければならぬ。行為的自己はいつも直観によつて限定せられると共に、直観はいつも無限の可能性を含んで居るのである。故に歴史的現在と考へられるものは、無限の過去から限定せられ居ると考へられると共に、無限の可能性を含んで居る（七・59）。

無限の過去と未来が織り込まれたこのような現在を西田は「歴史的現在」と呼ぶ。また、歴史的現在において行為する個物の身体は「歴史的身体」といわれる（八・391）。西田が個物は身体的存在であるという時、その身体とは歴史的身体にほかならない。個物は歴史的身体をもち、歴史的現在において行為するのである。

2.4 行為的直観とポイエシス

行為と時間について、先の引用からさらに気づかれることがある。それは、「決定せられたもの」としての過去と「無限の可能性」としての未来を織り込んだ歴史的現在における行為が「直観」と不可分なものとして論じられていることである。行為という能動的なイメージを惹起するモチーフとは反対に、直観は受動的なイメージを喚起する。西田によると、一般的に能動的と考えられる行為にはこうした受動的な直観が常に既に作用しているのである。西田はこうしたあり方の行為を「行為的直観」と定式化する。

> 我々は行為によつて物を見、物が我を限定すると共に我が物を限定する。そ

れが行為的直観である（七・101）。

身体的自己は却つて世界の自己限定の機関といふことができる。而してかゝる世界は主観が客観を限定し客観が主観を限定し、我々が行為によつて物を見、物が我々の行為を限定する行為的直観の世界から考へられるのである。〔……〕我々はかゝる世界の個物的限定として身体を有つ。我々の身体はかゝる世界の個物的限定として歴史的身体である（七・136）。

行為的直観を理解する上で押さえるべきは次の三点である。

①相互性。上記引用からも分かるように、行為的直観は「我々」から「物」への一方的な働きかけではない。そうではなく、行為的直観にはどこまでも「物」から「我々」への働きかけが伴う。この意味で、行為的直観とは単一の個物に内属する能力ではなく、複数の個物間において働く作用である。

②個物の身体との連関。上記二つ目の引用にあるとおり、個物相互の作用としての行為的直観は個物の身体、すなわち歴史的身体を以てなされる。行為的直観をなすのは、歴史的身体をもった個物である。

③創造性。歴史的身体が過去と未来を織り込んだ歴史的現在においてあることは既に確認した。この決定された過去を西田は「作られたもの」とも表現する。つまり、歴史的現在はどこまでも「作られたもの」としての過去による制約を受けている。しかしその一方で、歴史的現在は「無限の可能性」としての未来からの限定を受け「無限の可能性」に開かれてもいる。

それゆえ、個物は歴史的現在においてそれ自身「作られたもの」として、「作られたもの」によって制約されると同時に、そこからまた新たなものを生みだす「作るもの」でもあるのだ。このような仕方で新たなものを作りだすことを西田は「ポイエシス」(7)と呼び、行為的直観の重要な性質として強調する。

そして西田によると、このように「作られたものから作るものへ」と推移することが「歴史」である（十二・359）。歴史的現在において歴史的身体をもった個物がなす行為的直観は「歴史」的なポイエシスである。そして、ポイエシスとしての行為的直観をなす存在者はあらゆる個物であり、決して人間にかぎられない。「能動受動の対立矛盾は啻に人間の事のみではない。それは生命の本質でなければならない。創造的なるものは自己矛盾的なも

のである」（八・63）。

まとめよう。西田において個物は、個物を包摂する一般者との関わりの只中で存在する。しかし個物は一般者の働きに汲み尽くされるものではなく、自身の働きと一般者の働きの交錯としての「行為」をなすものである。この行為は個物の存在根拠であると共に他の個物と交流する媒介としての身体において実現する。さらに、こうした個物の身体は、過去と未来が織り込まれた「歴史的現在」という時間概念にも結びつけられ、歴史的現在においてある個物の身体は「歴史的身体」と呼ばれる。そして、歴史的身体をもって個物がなす行為とは、相互性・身体性・創造性を備えた「行為的直観」と定式化されるものである。あらゆる個物の行為は、ポイエシスとしての行為的直観である。

3. ビーバーと行為的直観

本節ではいよいよ、前節でみた後期西田哲学の議論の具体的事例としてビーバーの生態をとりあげる。しかしその前にまず、西田自身のビーバーへの言及をみておこう。先述のとおり、行為的直観においては物を作りだす「ポイエシス」が重要な契機である。西田のビーバーへの言及もポイエシスとの関連においてなされる(8)。

> 動物も物を作る、海狸の如きは巧妙な建築家と云はれる。又或動物は道具を作るとすら考へられる。併し動物は物を物として見るとは考へられない、動物は対象界を有たない（八・10）。

> 動物は道具を有たない。海狸の作つたものが如何に巧妙であつても、それは道具を用ゐたのではない。動物の仕事は、何処までも単に目的的たる本能的動作を出ない（十・236）。

西田の主張を要約しよう。ビーバーは確かに流木を用いて川の流れをせき止めるダムや、生活するための巣を作っているようにみえる。しかし、それは人間のように流木を自身に対して外的な対象として用いているのでは

ない。ビーバーは「本能的動作」、つまり生物としての本能に従っているだけである。そのため、ダムや巣を作るための流木は材料や道具なのではなく、本能に従うビーバーたちの身体の延長に過ぎない。この意味でビーバーは物を物としてみておらず、道具をもつともいえない。そして、ビーバーが物を物としてみないのであれば、ビーバーはそもそも物を作っておらず、ポイエシスを行っていないと考えられる。

こうしたビーバーに代表される動物への西田の態度は、先行研究でも無批判に前提・肯定されてきた(9)。そこから西田のポイエシスを人間の芸術的創作に限定した上で論じられもする（小坂 2022:165-167）。つまり、動物に対する西田の態度を基に人間を称揚する方向へと議論がなされてきた。

しかしながら、現代の私たちの感覚からすると、巧みに木や泥を使用し、住処となる巣や川の流れをせき止めるダムを作るビーバーが「物を物として見」ない、「対象界を有たない」、「道具を用ゐ」ない存在者であるとは考えにくい。上述した西田の主張は、西田や先行研究がいうほど自明ではないと思われる。

そこで私たちは、ビーバーを後期西田哲学の体系に当てはまるものとして、すなわちビーバーこそがまさに後期西田哲学の議論を体現するものであるという解釈の提示を試みる。以下ではこのことを、近年の動物学の成果を借りながら論じる。それにより、西田本人が捉え損ねた後期西田哲学のポテンシャルを示す(10)。

3.1 ビーバー再考

前節の内容を思いだそう。西田において個物は歴史的現在において行為的直観するものであり、その行為的直観は能動性と受動性の両方を含む。つまり、行為的直観は原理的にその個物による一方的な働きのみならず他の存在者からの働きかけも伴う。しかも、それは単に共時的な存在者だけでなく、過去や未来に存するものからの働きかけも含まれる。

個物が以上のような行為的直観から捉えられる時、その個物はもはや私たちが一般的にイメージするものとは全く異なる。個物は決して単独で存在するものではなく、したがって individual という単語の語源的意味である「分割不可能なもの」でもない。そうではなく、個物はどこまでも他の存在者と関わるかぎりで成立するのである。また、現在において過去と未来が同

時存在的であるということから、「いま・ここ」に定位する個物の存在はそこから観測できる範囲を遥かに超えたものに基づけられているともいえる。

西田の個物論に従えば、私たちは「ひとつの個物」を通常考えるような仕方で捉えることはできない。ひとつの個物は皮膚で境界づけられた身体のスケールを超え、ひとつでない様々な存在者との関係を織り込む存在者である[(11)]。西田が行為（的直観）・身体・時間といったテーマを乱れ打ちながら論じる個物とはこうしたものである。また、この様々な存在者との関係は人間の関与しない「物と物の間」にも成立する（六・46）。そのため、ここでの個物は決して人間にかぎられない。

さて、ビーバーである。以上の内容を踏まえビーバーの生態をみてみよう。ビーバーは北アメリカやヨーロッパに生息する大型齧歯類である（Müller-Schwarze 2011:2-4）。ビーバーは一夫一妻制であり、両親、一歳のコドモ、そしてその年に生まれたコドモで構成される比較的小さな群れを形成する（Müller-Schwarze 2011:30; M. Gurnell 1998:168）。コドモの多くは成長すると生まれ育った縄張りを離れ、新たな縄張りをもち繁殖する（Mayer, Zedrosser, & Rossell 2017; Sun, Müller-Schwarze, & Schulte 2000）。そしてビーバーは、木や岩、泥などを材料にして巣やダムを作る。しかも単に作るだけでなく、必要に応じてそれらを補修する（Müller-Schwarze 2011:34）。

Jones らは、アメリカのアラスカ州コツェビュー付近での調査において、2002 年から 2019 年にかけてビーバーのダムの増大によってその地域の地表水面積が増大したことを報告している（Jones, Tape, Clark, Nitze, Grosse, & Disbrow 2020）。野生のビーバーの寿命が 10 年前後である（Müller-Schwarze 2011:93）ことを考え合わせれば、ビーバーの作るダムや巣は、ビーバーの一個体としてのライフスパンを超えて存在し周囲の環境に長期的に影響を及ぼすと解される。ビーバーによって作られる巣やダムは一世代のみで無くなるものではない。他の個体や、複数の個体によって構成される群れによって補修・維持されることで、世代を超えて継承され残存するのである。

3.2 ビーバーと行為的直観

以上のビーバーの生態を前節の議論に基づき解釈しよう。

まず、ビーバーの行う巣やダムの制作・補修は、前節でみた行為的直観の三つの性質を満たしている。ビーバーは身体の一部である歯を使って樹木

を切断・加工し、それらを岩や泥と組み合わせて巣やダムを作る。つまり、身体を媒介として既存の事物を作り変え、新たなものを創造する（身体性・創造性）。また、巣やダムの建築は一個体の働きによるものではない。他の個体と共に形成している集団での協力や川の流れなど周囲の環境との交流においてなされる（相互性）。

「道具には代用可能といふことがなければならない。そこには既に物を物として見ると云ふことがなければならない」（八・10）と西田はいう。以上のようにビーバーの行為を捉えると、そこでは木や岩や泥、そして自身の身体である歯までもが、巣やダムを作るための材料ないし道具として使用されるといえる。西田に沿うならば、これらはいずれも代用可能なもの、つまり別のものと取り換えられ得るものである。実際、ビーバーはダムを作る場所の状況に合わせて、使用する材料やダムを作る方法を変える。例えば、浅瀬では泥や葉や小枝を堆積させるが、大きな川では重い石や約 2 メートルの木の棒を使用し、強固な土台を作る（Müller-Schwarze 2011:56）。

つまり、ひとえにダムを作るといっても、ビーバーは周囲の環境に合わせて使用する材料や方法を別のものに代えているのである。そのように「代用可能」なものとして身体や物を使用することには既に「物を物として見ると云ふこと」が伴う。つまり、ビーバーの行為を西田の議論に基づいて解釈すれば、ビーバーも「物を物として見る」と考えられるのである。

そして何より重要なのは、ダムや巣が複数の個体によって補修・維持されることで世代を超えて残存し継承されることである。ダムや巣の補修という行為は――少なくともビーバーが絶滅したり、ビーバーの生息する環境が壊滅したりしないかぎり――終わることがない。個体や世代を超えてなされるこの行為は、ダムや巣が絶えず変化する環境のなかに存在する以上、決して完了しない作業である。

この意味で、ビーバーにおけるダムや巣の補修および継承は、常に未完了の行為、すなわち「動的に展開されつつある進行形」（平井 2022:125、強調原文）のかたちで表現される行為でしかあり得ない[(12)]。ビーバーによるダムや巣の補修は、一個体で完結しない、世代を跨ぐ未完了の行為である。

未完了の行為については、西田をはじめとする京都学派の論者において既に論じられている。なかでも行為の未完了性をいち早く指摘したのは西

田の歴史論を忠実に継承し発展させた（藤田 2018:306）高坂正顕（1900-1969）である。高坂は『歴史的世界』（1937）において以下のように述べる。

> すべて歴史の内なるものは、完了せるものではなくして、なりつつあるものなのである。言葉の戯れが許されるならば、geschehen（過去分詞形）は geschehen（現在形）なのである（高坂 1964:17）。

> 歴史的世界は非完結的完結性の世界である。歴史的世界があくまでも「不完全性なる芸術品」に止まらねばならぬ一つの理由はここに存するのではなかろうか。しかしてかかる非完結的完結性の故に、時代より時代への推移も可能になるのではなかろうか（高坂 1964:112）。

高坂は、歴史におけるあらゆるものの未完了性・不完全性を強調する。またそれと並行して、不完全なものがおいてある世界も「不完全性なる芸術品」と表現される。これらの未完了・不完全な性格は決して否定的な意味あいではない。作られるものがどこまでも未完了であり不完全であるからこそ、次の世代へと引き継がれ、新たなものを創造する行為が生起する。この意味で、未完了・不完全であることはどこまでもポジティヴな意味をもつ。

高坂が強調する歴史の未完了・不完全な性質は、高坂が着想を得た西田の議論にもみいだせる。それは、西田が個物を「歴史的事物」と呼び、それを行為的直観と関連づけて論じる文脈においてである。

> 物とは歴史的事物である。我々は歴史的身体的に物を見るのである。そしてそれはその根柢において作るべく作られたもの、否定せらるべく見られたものとして、それを歴史的に構成して行くのである（八・221）。

高坂が歴史的世界という巨視的な立場からその不完全性やそこにあるものの未完了性を論じるのに対し、西田はよりミクロな視点を採る。西田は歴史的世界においてある個物やその身体性から不完全性・未完了を論じる。

西田において「歴史的事物」としての物は一面において「作られたもの」「見られたもの」である。つまりそれに先行する「作る」や「見る」といった行為が完了した結果として存在するものである。しかし他面において、そ

れらは「作る」「否定される」という契機を含む。それらは単なる完成物ではなく、次の行為によって別様に作り変えられもする。西田のいう「歴史」とは、一面において「作られたもの」として完了したものが他面において否定を伴う未完了のプロセスに置かれ、新たなものを創造する「作るもの」すなわち歴史的事物として存在し続けることそのものである。

高坂を介して解釈した西田の議論を踏まえ、再びビーバーをみてみよう。集団による未完了の補修によって存続し相続される巣やダムは西田のいう「歴史的事物」として存在する。それらは、ビーバーにだけでなく他種が生きる周囲の環境にも影響を及ぼす(13)。つまり、ビーバーの巣やダムは時間的にも空間的にもひとつの個物としてのスケールを超えた関係を織り込んでいる。したがって、それらは西田のいう歴史的事物といえるのである。

そして、歴史的事物としての巣やダムと共に生き、世代を超えてそれらを作り変えつつあるビーバーも、同様に歴史的事物としての個物であるのだ。こうしたことから西田は「動物の本能的生活といへども、それが歴史的形成的なるかぎり、行為的直観的であるのである」（八・263）という。

前節で検討した西田の議論と、それを用いて本節で検討したビーバーの生態から、私たちは次のようにいえる。すなわち、巣やダムと共に生きるビーバーこそが、西田の論じる世界におけるポイエシスに参与する歴史的な個物を体現する存在者である。

しかし、西田本人はビーバーをそのように扱わなかった。それは、人間を道具使用や道具制作、対象の認識から特徴づけることが先行し、ビーバーを人間的な見地から論じるに止まったからと思われる。

もちろん、これには時代的な制約もあろう。ともあれ私たちは、西田においてはビーバーの生態への目配せが不十分であったと考える。西田は、ビーバーが生きる只中で確かになされる行為的直観によるポイエシスを捉えられず、自身の哲学の射程を制限しかねない叙述を行ったのである。

まとめよう。ビーバーは集団で巣やダムを作る。ビーバーによって作られる巣やダムが世代を超えて継承されることや周囲の環境に影響を及ぼすことから、巣やダムが一個体としてのビーバーのスケールを超えていること、ビーバーの制作行為がどこまでも未完了であり不完全であることがみいだされる。西田や高坂は、こうした行為の未完了・不完全な性格を自身の歴史

論に基づいて論じる。行為によって作られたものは、次なる制作行為によって作り変えられることに開かれた「歴史的事物」として存在する。ビーバーの作る巣やダムは、西田のいう歴史的事物と考えられる。後期西田における行為論や歴史論を踏まえると、まさにビーバーこそが、西田の論じる歴史的な行為をなす個物の体現であるといえる。

4. 結論にかえて—西田幾多郎のマルチスピーシーズ哲学展望

以上、本稿では後期西田哲学について、ビーバーの生態を具体的事例として参照しつつ、西田によるビーバーへの言及と併せて検討してきた。本論をとおして考えられたことを改めて述べておこう。

ビーバーは決して西田の論じる歴史的世界から排斥されるものではない。それは、ビーバーが関係する他の生物や事物についても同様である。第二節で述べたように、西田は人間や動植物にかぎられないあらゆる存在者を行為的直観する個物と捉える。しかも個物は「いま・ここ」において共時的に存在するものだけでなく、無限の過去や未来における存在者と共にある。

ビーバーの場合、それは世代を超えて継承される巣やダムである。巣やダムと関わりながら生きるビーバーは、一個体としての時間的・空間的スケールを超えた関係を織り込んだ個物である。時代的な制約もあり、西田は近年の動物学の成果にも触れられず、ビーバーの生態を十分に検討しなかった。そのため、ビーバーに対して迂闊な記述をせざるを得なかった。

しかしながら、西田がビーバーのような具体的事例を十分に検討しなかった、あるいは特定の存在者に拘泥しなかったからこそ、私たちはマルチスピーシーズ哲学としての西田哲学のさらなる拡張可能性をみることもできる。特に、無限の過去と未来が織り込まれた歴史的現在についての議論から、私たちは西田哲学を、人間や生物を超えた存在者にも届くものと考えることができる。より具体的にいえば、過去の「生物発生以前の世界」や未来の「新しい」存在者をも構想するようラディカルなマルチスピーシーズ哲学として西田哲学を読むことが可能である。

本結論では、私たちがビーバーと共に着目した西田哲学のマルチスピーシーズ的な側面に関して、西田哲学のラディカルなマルチスピーシーズ哲

学への拡張可能性を見届ける。そこにおいて、第一節で触れた「菌類、ウイルス、精霊、機械など種を超えた存在のエージェンシー」(近藤・吉田 2021:30)を俎上に載せるマルチスピーシーズ民族誌と後期西田哲学が強く共鳴する論点がみいだされる。

改めて、個物がおいてある「歴史的現在」についてみよう。

> 過去は現在に於て過ぎ去つたものでありながら未だ過ぎ去らないものであり、未来は未だ来らざるものであるが現在に於て既に現れて居るものであり、現在の矛盾的自己同一として過去と未来とが対立し、時といふものが成立するのである。而してそれが矛盾的自己同一的なるが故に、時は過去から未来へ、作られたものから作るものへと、無限に動いて行くのである(八・368)。

既に確認したとおり、歴史的現在には過去と未来とが織り込まれている。現在ではないものとして現在と矛盾対立する無限の過去と未来が、現在の中心性を損なうことなく現在に畳み込まれている(14)。このことを西田は現在の「矛盾的自己同一」と表現する。そして繰り返すが、そのような現在こそが「歴史的現在」として、「作られたものから作るものへ」という未完了の過程である「歴史」を形成する。

以上のように歴史的現在を捉える西田は、歴史的現在において個物が行為する世界の射程を、人間はもちろん生物をも超えたものにまで拡張する。私たちの見立てでは、ここにこそ西田哲学をさらなるマルチスピーシーズ哲学として捉える手がかりがある。

> それ〔歴史的世界〕は矛盾の自己同一として何処までも決定せられたものでありながら、何処までも自己自身を越え、自己自身を構成し行く、即ちいつも歴史的現在であるのである。人類発生以前、否生物発生以前の世界も、かゝる世界であつた(八・243、強調引用者)。

ここで西田は「人類発生以前」の世界や「生物発生以前の世界」をも「歴史的現在」が成立する世界、すなわち歴史的世界として捉える。歴史的世界は人間や生物を超えて広がるのである。

詳しくみていこう。ひとつの個物とそれがおいてある歴史的現在に織り

込まれる時間は、西田においては無限の過去と未来である。それゆえ、それらはひとつの個物としてのスケールを超えて無限に延び広がる。特に無限の過去に着目するならば、それは個物の発生以前にまで伸長できる。ビーバーのような生物としての個物であれば、生物というものが発生するよりも前に遡ることができるし、ビーバーが作る巣やダムのような物としての個物であれば、その材料である木や岩が発生する以前に遡ることができる。歴史的現在における歴史的事物としての個物には、そのような無限の過去が畳み込まれている。

西田の記述に基づき、ここでは「生物発生以前の世界」に焦点を絞ろう。生物が発生する以前の過去の世界として西田は「物質的世界」を置く。西田によると、生物ではない物質が蠢く世界においては、物質がある一定のまとまりをもつことで生物が発生すると考えられる（八・290）。そして生物を構成する物質が歴史的現在に織り込まれるものである以上、物質的世界も歴史的世界に参与するものと捉えられる。いいかえれば、物質的世界も物質がそこでポイエシスをなす世界と解される。

西田はこうした物質的世界について、人間と対比しながら論じてもいる。

> 併し今日の人間と云つても、個物的なものの極限とも考へられない。之に反し原子的過程に於て、既に歴史的個物性を認めなければならないであらう（八・245）。

上記引用の二文目については既に論じたとおりである。西田は「生物発生以前」に置かれる物質や原子も「歴史的個物」つまり歴史的事物として捉える。物質や原子も、それ自身「作られたもの」であると同時に、新たなもののポイエシスを担う「作るもの」である。したがって西田においては、物質や原子すらもビーバーと同じく様々な存在者との関係を織り込んだ個物なのである。

さらに着目すべきは、上記引用の一文目において西田が「物質的世界」や「原子的過程」に代表される過去だけでなく、未来にも目を向けている点である。西田によると「今日」の世界における人間は個物の極限ではない。つまり、人間が個物として一般的なものの限定を逃れる典型的な存在者では

あっても、それは人間が個物としての極致であるということではない。より踏み込んでいえば、「今日」を超え出た先の未来において、より「個物的なものの極限」として捉え得る新しい存在者が現れる可能性もある。

「歴史は宇宙開闢史的に始まるのである」（八・244）と西田はいう。私たちは、後期西田哲学における歴史・個物・ポイエシスをめぐる議論において、既存の枠組みや概念に当てはまらない新たな個物の発生ないし新たな歴史や世界が開始される可能性をみることができるのである。

この点に関して、西田本人は「新しい人間は、再び人間成立の根柢に還つて、制作的・創造的人間として生れ出なければならないのではないかと思ふ」（八・300）と述べるに止まる。この西田の記述は、行為によって新たなものを制作・創造する存在として人間を捉えなおすことを示唆するものであり、その着眼点はあくまで人間にある(15)。

この西田の立場に対して、本稿でみてきたように「人間」ではなく新たなもののポイエシスを担う個物の「制作的・創造的」側面に強調点を置くならば、私たちは、単に共時的・空間的な存在者の相互関係だけでなく、人間や生物を時間的・空間的に大きく超えた存在者にも着目し、それらの制作行為を理論的に記述するラディカルなマルチスピーシーズ哲学として西田哲学を読解することが可能である。そしてそこにおいてこそ、「種」や「生命」を根底から問いなおす西田哲学の姿をみることができる。そうしたラディカルなマルチスピーシーズ哲学として西田哲学を解釈することで、西田哲学から現在のマルチスピーシーズ民族誌に新たな理論的視座を与えることができると考えられる。

注

(1) 西田哲学の時期区分について、本稿では「新資料 哲学論文集 首巻」の記述に基づき、『善の研究』（1911）から『自覚に於ける直観と反省』（1917）までの著作を前期、『働くものから見るものへ』（1927）から『無の自覚的限定』（1932）までの著作を中期、『哲学の根本問題』（1933）以降の著作を後期とする（西田・浅見・中嶋 2021）。

(2) こうした世界の記述について、生態学の観点から議論を展開した論者に今西錦司（1902-1992）がいる。今西は『生物の世界』（1941）において、生物の「生活の場」としての「環境」と生物の関係について、西田のそれの影響がみられる議論を展開している（上山 1972）。また野家啓一は、この「環境」に着目し環

世界論で知られるユクスキュルから西田、今西の生命論の近接性を論じている（野家 2002）。

(3) この点について、別の箇所で西田は「我々の行動といふのは普通には単なる自己を中心として考へられるのであるが、寧ろ世界を中心として考へられるものでなければならない」（六・197）とも述べている。

(4) 西田は「海狸」と表記しているが、本稿では引用文を除き「ビーバー」に統一する。

(5) 白井雅人は西田における個物を「創造的な人格的自己」とし、机や鉛筆といった物は「我」と関係するかぎりにおいて「人格的意義」をもつことを指摘している（白井 2003）。これに対し本稿では、西田哲学における個物を人格からではなく身体を伴った「行為」から捉える。「人格は我々の身体的自己の歴史的・社会的制作から発展し来るのである」（八・277）。

(6) 先の引用箇所以外でも、後期西田は個物が一般者の一部分や極限ではないことを度々強調する（六・148; 七・87; 八・469）。

(7) 「ポイエシス」は一般に「制作」と訳される。西田自身もたびたび「制作」という語を使用するが、それがもつ主観的なイメージゆえに必ずしも満足のいくものではなかった（二十四・191）。こうした事情を鑑み、本稿では「ポイエシス」の語をそのまま使用する。

(8) 西田のビーバーへの言及の元になっているのは、カール・マルクス（1818-1883）によるものであると思われる。マルクスは「出版の自由と州議会議事の公表とについての討論」（1842）や『経済学・哲学草稿』（1844）においてビーバーに言及している（マルクス・エンゲルス 1959:72; マルクス 2010:102）。また、ビーバーへの言及に止まらず、後期西田哲学がマルクスの思想を下敷きにしていることも既に指摘されている（太田 2023:76-108）。

　これに関して、マルチスピーシーズ民族誌においてもマルクスの影響が存する。『マツタケ』（2015）においてマルチスピーシーズ民族誌を展開するアナ・チンは、マルクスにおける「疎外」を非人間も含む意味に「拡大解釈」（チン 2019:15）することでこれを複数種（マルチスピーシーズ）の絡みあいと接続し、その上で「疎外」を批判的に論じる。彼女によると「独立したひとつの資産だけが考慮されるように景観を変えていく」（ibid.:10）ことを目指す「疎外」によって、複数種が絡みあう場が瓦解する（ibid.:9-10）。つまり、複数種の絡みあいが「生産過程」として、絡みあいの只中で生じるものが「生産物」ないし「資産」として単純化される。そして「単一の資産がもはや生産されないともなると、その場は見捨てられてしまう」（ibid.:10）。このようにマルチスピーシーズ民族誌においては、複数種の絡みあいを捨象する「疎外」の批判という形でマルクスの思想が引き継がれている。私たちはマルクスをつうじて西田哲学と今日のマルチスピーシーズ民族誌の共鳴をみることもできるのである。

(9) 例えば板橋（2008）、杉本（2013）

(10) 森野雄介は後期西田哲学全体に対して、その人間中心主義的な態度を批判的に論じている（森野 2022）。これに対して私たちは、後期西田哲学それ自身において人間中心主義を脱するための議論が存すると考える。

(11) この論点について、山崎吾郎の論考から多くの示唆を得た（山崎 2024）。山崎は、多様な存在者がもつ身体性や時間スケールからそれらの相互関係を論じるにあたり、人間的な身体や時間のスケールを超えているがゆえに人間的なものの延長ではない「人間ならざるもの」に固有の身体性や時間スケールへの着目を提案している。

(12) 杉山直樹は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（1859-1942）の検討において、この未完了相について詳しく論じている（杉山 2006; 平井 2022:36）。本稿では、こうした未完了への視座が西田や高坂にも存すると考える。

(13) ビーバーに関する近年の報告は、こうした観点からのものが散見される（Levine & Meyer 2019; Stoll & Westbrook 2020; Miranda, Hoyos-Santillan, Lara, Mentler, Huertas-Herrera, Toro-Manríquez, &Sepulveda-Jauregui 2023）。

(14) これはもちろん、過去と未来のいずれかを中心に据えない仕方で、である。西田によると、過去を中心に据えれば、個物が物理的因果に従うものとして措定される機械論的な世界観を想定することになる。逆に未来を中心に据えれば、個物が一つの目的へと向かうものとして措定される目的論的な世界観となる。西田において前者は「多の一」、後者は「一の多」と呼ばれ、いずれも新たなものの創造が考えられない点でその中心性が退けられる（八・368）。

(15) このことの背景には、1930 年代の日本哲学の一大テーマであった「哲学的人間学」の影響があると思われる。そこでは西田や田辺元（1885-1962）を中心とする論者によって、人間の行為や身体性に着目することで既存の人間観を問いなおす議論が展開された（藤田 2018:196-198; 横山 2005）。

凡例

西田 幾多郎 2002-2009『西田幾多郎全集』岩波書店からの引用・参照は、漢数字で巻数、アラビア数字で頁数を示し本文に記載する。例えば第五巻 10 頁からの引用・参照は（五・100）と表記する。なお引用中の〔〕は断りのないかぎり引用者による。

参照文献

アリストテレス 1971『アリストテレス全集 1』山本 光雄・井上 忠・加藤 信朗訳、岩波書店。

池田 善昭 2018『西田幾多郎の実在論 AI、アンドロイドはなぜ人間を超えられないのか』明石書店。

板橋 勇仁 2008『歴史的現実と西田哲学 絶対的論理主義とは何か』法政大学出版局。

上山 春平 1972「解説」今西 錦司『生物の世界』pp. 173-191、講談社。

太田 裕信 2023『西田幾多郎の行為の哲学』ナカニシヤ出版。

奥野 克巳 2019「人類学の現在、絡まり合う種たち、不安定な種」『たぐい Vol. 1』

pp. 4-15、亜紀書房。
————2021「モア・ザン・ヒューマン——人新世の時代におけるマルチスピーシーズ民族誌と環境人文学」奥野 克巳・近藤 祉秋・ナターシャ ファイン編『モア・ザン・ヒューマン——マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』pp. 5-32、以文社。
カークセイ、S.E.・ヘルムライヒ、S.2017「複数種の民族誌の創発」近藤 祉秋訳『現代思想』45 (4):96-127、青土社。
高坂 正顕 1964『高坂正顕著作集 第 1 巻』理想社。
小坂 国継 2022『西田幾多郎の哲学——物の真実に行く道』岩波書店。
近藤 祉秋 2022『犬に話しかけてはいけない——内陸アラスカのマルチスピーシーズ民族誌』慶應義塾大学出版会。
近藤 祉秋・吉田 真理子 2021「人間以上の世界から「食」を考える」近藤 祉秋・吉田 真理子編『食う、食われる、食いあう　マルチスピーシーズ民族誌の思考』pp. 10-65、青土社。
白井 雅人 2003「個物とは何か？ ——「弁証法的一般者としての世界」から——」『哲学論集』32:65-78。
杉本 耕一 2013『西田哲学と歴史的世界 宗教の問いへ』京都大学学術出版会。
杉山 直樹 2006『ベルクソン 聴診する経験論』創文社。
チン、アナ 2019『マツタケ——不確定な時代を生きる術』赤嶺 淳訳、みすず書房。
西田 幾多郎 2002-2009『西田幾多郎全集』岩波書店（全 24 巻）。
西田 幾多郎・浅見 洋・中嶋 優太 2021「新資料 哲学論文集 首巻」『西田哲学会年報』18:125-130。
野家 啓一 2002「主体と環境の生命論——西田幾多郎と今西錦司——」日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』第三号、pp. 29-51、昭和堂。
檜垣 立哉 2011『西田幾多郎の生命哲学』講談社。
平井 靖史 2022『世界は時間でできている ベルクソン時間哲学入門』青土社。
藤田 正勝 2007『西田幾多郎 生きることと哲学』岩波書店。
————2018『日本哲学史』昭和堂。
松木 貴弥 2024「「行為するもの」としての「この個物」——『無の自覚的限定』における個物と〈弁証法的物質的な身体〉をめぐって——」『西田哲学会年報』21: 116-131。
マルクス、K.・エンゲルス、F. 1959『マルクス＝エンゲルス全集 第 1 巻』大内 兵衛・細川 嘉六監訳、大月書店。
マルクス 2010『経済学・哲学草稿』長谷川 宏訳、光文社。
森野 雄介 2022「猫と歴史的世界 あるいはストレンジャーのポイエシス——アンリ・

マルディネから西田幾多郎を読み直す――」『金沢学院大学紀要』20:238-257。
山崎 吾郎 2024「山の時間、社会体のリズム」近藤 和敬・檜垣 立哉編『21 世紀の自然哲学へ』pp. 63-82、人文書院。
横山 太郎 2005「日本的身体論の形成――「京都学派」を中心として」『UTCP 研究論集』2:29-44。
Gurnell, A. M. 1998. The hydrogeomorphological effects of beaver dam-building activity. *Progress in Physical Geography* 22(2):167-189.
Jones, B. M., Tape, K. D., Clark, J. A., Nitze, I., Grosse, G., & Disbrow, J. 2020. Increase in beaver dams controls surface water and thermokarst dynamics in an Arctic tundra region, Baldwin Peninsula, northwestern Alaska. *Environmental Research Letters*15(7): 075005.
Levine, R., Meyer, G.A. 2019. Beaver-generated disturbance extends beyond active dam sites to enhance stream morphodynamics and riparian plant recruitment. *Scientific Reports* 9: 8124.
Mayer, M., Zedrosser, A., & Rosell, F. 2017. Couch potatoes do better: Delayed dispersal and territory size affect the duration of territory occupancy in a monogamous mammal. *Ecological and Evolution* 7: 4347-4356.
Miranda, A., Hoyos-Santillan, J., Lara, A., Mentler, R., Huertas-Herrera, A., Toro-Manríquez, M., & Sepulveda-Jauregui, A. 2023. Equivalent impacts of logging and beaver activities on aboveground carbon stock loss in the southernmost forest on Earth. *Scientific Reports* 13:18350.
Müller-Schwarze, D. 2011. *The Beaver: Its life and impact, second edition*. Ithaca and London: Comstock Publishing Associates, a division of Cornell University Press.
Stoll, Nl., Westbrook, C.J. 2020. Beaver dam capacity of Canada's boreal plain in response to environmental change. *Scientific Reports* 10:16800.
Sun, L., Müller-Schwarze, D., & Schulte, B. A. 2000. Dispersal pattern and effective population size of the beaver. *Canadian Journal of Zoology* 78: 393-398.